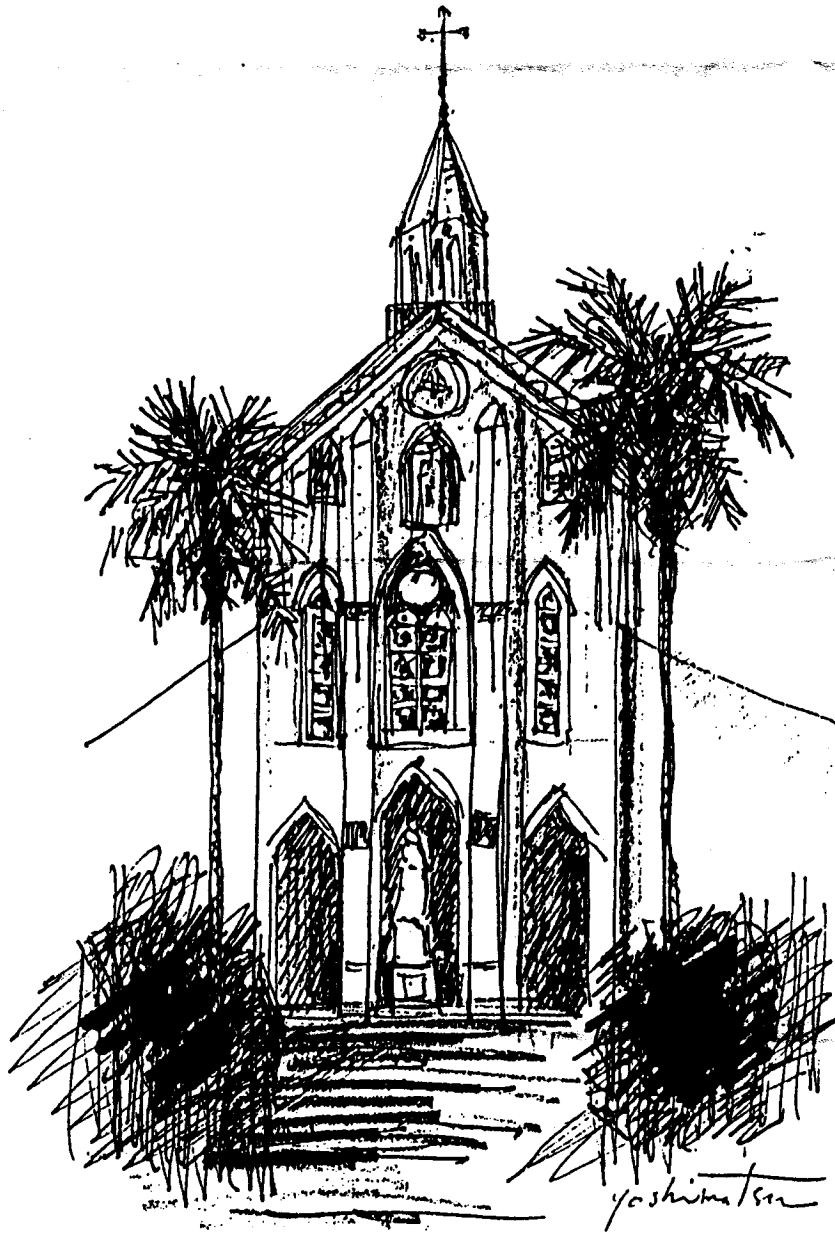


# いしだたみ



長崎南高関西同窓会報 VOL. 2

いしだみ第2号をお届けします。今回は第2回総会と会員の近況報告をメインとしました。

総会は広瀬方人先生と東京の早水茂雄同窓会長、長崎県人会会長、長崎県大阪事務所長、長崎の五つの高校の関西同窓会の代表者も含め総勢130名の参加がありました。会場は音響、映像設備の整ったNTTの共済会館

でしたので、特注で制作した長崎南高関西同窓会の文字入りの大凧9枚を掲揚し、スクリーンに写る南高の近況に参加者は懐かしく、そして楽しい時を過ごすことが出来ました。広瀬方人先生と田中佳子さんの記事でその雰囲気味わってください。今後のいしだみの充実のために会員の皆さんの投稿をお願いします。

### 前南高英語教諭 広瀬 方人

第2回関西同窓会にお招きいただいて有難う。思いがけない出会いがあって、ほんとうに嬉しい集まりでした。まず、JR福島駅で下車して、外に出たところで会場案内の地図を見ていたら「南高の同窓会に行かれるのですか？」と声をかけられた。「僕も行くんです」と言って案内してくれたのは、今年3月南高から京都大学に入ったという卒業生だった。不慣れた大阪の街で少し緊張していた私は暖かい気持ちになって、安心して彼の案内に従った。

会場に到着すると、そこにもここにも懐かしい顔があった。卒業以来はじめてという顔も多い。しかし言葉を使い始めると、たちまち高校生時代の顔がその表情や声や言葉使いの中に蘇ってきた。

神戸に在住しているというK君が「先生、安心して下さい。何とか一人前にやっていますから」と声をかけてくれた時、そんなにも素直に感謝してくれる彼を前に、教師であることの幸せを感じた。

また「先生が高校生と一緒に原爆瓦を掘っているという記事がこちらの新聞に出ていたので、切り抜いてお

たのを持って来ました」と、数年前の新聞切抜きをHさんから手渡された時、私は一瞬胸がつまってものが言えなかった。20年も前の高校での出会いを、そんなにも忘れないでいてくれる卒業生がいたことに感激した。嬉しかった。

長崎に帰ってから出した手紙の一つで、「私はもう同窓会に行くことはやめたいと思っている。あまりに年老いた姿を見せたくない。卒業生の皆さんには、いつまでも生き生きしたかつての教師の姿のままにいたいから」と書いた。しかし、昨年秋、古川憲介校長先生の喜寿のお祝いの席にうかがった時、美しく年老いておられる古川先生の姿に私は全く敬服した。飾らず一途な性格は昔のままに、静かで落ち着いた老人になっておられた。これから私も美しく年老いていくことを心がけたい。年老いた自分の姿を見せたくないという見栄っばりの自分を脱して、ありのままの自分を受け入れることの出来る人間になりたい。今、そんなことを考えている。

古川源蔵会長、松本藤一事務局長を中心に関西同窓会がますます発展していくことをお祈りしています。

(1992年11月2日)

### 果樹栽培 田中 桂子 (旧姓・米原) (3回卒)

原稿…、千字…、ノ切…。この原稿依頼の電話をお受けた時、そんな言葉が頭の中を飛び交い、懐かしい感慨がふわっと湧いてきました。高校時代の部室の香りと共に……。

私事ながら、新聞部だった私のあの頃に少しお付き合い下さいますか……。

3回卒の私達の頃は、設備も広さも充分ではなかったのか、とにかく部室は転々と移動していたように思います。中でも印象深いのは、教室をベニア板で三つほどに仕切った雑居部室。確か文芸部、演劇部などと同居していたように思います。文化祭ともなると次第に熱が入ってくる芝居の稽古を聞きながら、時には覗き見しながら原稿を書いたりしていたのです。そんな中に、三年間をトータルすれば、教室に居る時間より部室で過ごす時間の方が長かったのではないかと思えるほど入り浸っていたものでした。

もうひとつ思い出すのは「夕月のカレー」。校正を終えての印刷所からの帰り、時々校則を違反して立ち寄りしたっけ。今思えば、結構進んでいたんだなと思われるルーだけのあのカレー、覚えておいでの方も多いことと思います。今も「夕月」は健在なのでしょう。

この九月に開かれた第二回関西同窓会の折、長崎の町や希望ヶ丘の校舎のスライドを見せていただき、懐かしく思ったものですが、今また部室での様々を思い起こしタイムスリップしてゆくような不思議な感じを味わっております。顧問の田中先生、雑居部室の皆様、いかがお過ごしでしょうか。とてもとても懐かしい。

あの頃から20数年経て、多くのボランティアの方々のおかげで関西同窓会が発足し、逢おうと思えば逢える機会が増えましたことは何より嬉しいことです。人によっては、あっても無くてもいいのが同窓会ですが、それを支える方々の中にある「想い」を遠くで見ている私達は忘れてはならないと思っています。その「想い」が、いつまでも消えずに若い方々に伝わっていきますことを祈っております。

20数年の間にはそれぞれにいろいろあるようで、私もあの頃には思いもしなかった地で、思いもしなかった暮らしをしています。高知の海辺の町で晴耕？雨織（つづれ織）の日々です。夫は晴耕雨読（ぼんかん有機栽培）の人。

山海の幸と縁に恵まれた地で、すっかり田舎のおばさんしているのです。時に田舎志向の折には、ご来遊下さい。どうぞおいでませ。

## ◇台湾と九州◇

三菱商事・大阪支社 甲斐 雄治(2回卒)

この7月に4年間の台北支店勤務を終え、大阪に帰国致しました。帰国後3か月、先ず第一に感じるのは“台湾”は我が“九州”と本当に良く似通っているということです。

ご承知の通り、台湾は九州に良く似た島国であり、その面積は約35,200平方キロと九州より一回り小さい国土で、約2,000万の人口がありますが、私が九州に良く似ているという理由は、何よりも風光明媚、環境抜群、至るところに美しい自然が残っているという点であり、しかも各都市が九州の各都市に似ているという点です。例えば“台北”が“福岡”で“高雄”は“北九州”ですし、高雄の南“東県”は“鹿児島県”で、最南端“墾丁”は“指宿”に似ています。さて我々が“長崎”といいますが、これは個人的見解ですが、“台中”の町並が30年以上前の“長崎”の町並みに似ていますし、又“花蓮”港近辺は、“大村湾”をかこむ“大村/川棚”“西彼杵”の風景に似ている様に思います。何故このような話をするかといいますが、私の持論であります“同じ環境の中では、同じような人格が生まれる”言い換えると、“人格形成は、その環境によって作られる”という論理が裏付けされるからであります。

台湾は戦争前まで日本の統治下で、日本人と一緒に生活していたため、歴史的に日本人に対して親近感があることもありますが、全般的に台湾人気性は、全く九州人

のそれに類似していると思われます。爆発的なエネルギーを持ち、一つのことに一生懸命頑張るし、性格的には大陸のおおらかで、祭や遊びも大好きであること。これは、温度の差こそあれ、全く同じ様な環境に育った民族同志の共通の性格ではないかと思うからです。扱って、私は、台湾生活4年の中で沢山の台湾の友人(例えば“優美”林清華会長、“新中美”李鳴鵬会長、“三偉”許桂珠会長、台湾如水会の会長も兼ねておられる“元彰化銀行頭取”呉金川会長等、友人というには僭越な気がするほどの経済界のトップの方々もたくさん居られます。)が出来ましたが、その一人一人の方が本当に私に親切で、まるで同窓会の先輩達のように親しくして頂きました。

(もちろん仕事や商売の時には極めて厳しい方達ですが・・・)私が台湾を去る折も、まるで100年の知己と別れる如くに名残を惜しんで下さいましたし、必ず日本に来て私に会って下さる約束もして頂きました。(その中の一人“厚生ガラス”徐風楳会長はすでに2度も大阪訪問され会って頂きました。)この方達が一律に言われるのは、日本大好き、特に九州大好き、特に私が長崎出身だと知ると、長崎が一番好きと言われることです。気候風土が似通っており、住む人達の性格が似通っているため、親近感を持たれるせいでありましょう。政治的には対中国との問題等国際的にも種々の問題を抱えておりますが、台湾は今急速に経済成長を遂げております。

“九州、長崎”の大好きなこの友人たちが台湾経済を引っ張っていき、10年後には、台湾が名実共にきっと素晴らしい経済大国に変身してくれるものと信じて楽しみにしておる次第です。

## ◇母校と九州の気質◇

京都大学・1回生 吉居 孝雄(29回卒)

早いもので、僕が京都に来てから8ヶ月が経った。京大は、非常に魅力的な街であり、至る所で新鮮な発見ができる。平安遷都以来約千二百年の古都の歴史を感じさせてくれる。

一方、京都にいと、時として九州にいた頃との違いを感じることもある。それはやはり気質の違いであろうと思われる。

ある日、大学で関西の友人たちと話していた時、話題が出身校にまで及んだことがあったが、僕の出身校の話をする、みんなが目を丸くするのである。そして口々に「そんな学校、今時あったんか」とか「気合入りまくってるな」とか「九州のノリはやっぱ違うな」という言葉を発する。僕が通った九州内の一つの高校の校風だけで九州のノリを判断されてもかなわぬが、考えてみると我が母校は独自の雰囲気があった様に思う。

まず先生方の気合にはかなり圧倒されるものがあった。最初の頃はそれが異様に感じたが、学年が進むにつれて、それが自然だと思える様になった。多分、先生方の気合が生徒にも浸透していったのだろう。そして今度は生徒自身が“気魄と情熱”という独自の校風を創っていく。こうして“気合”の要素が生徒にも身につく、それが伝統となる。

先日、興味深い本を手にした。それには九州独自の気質が述べられていたが、九州人の特質として、「情熱的」「バイタリティに富む」「責任感が強い」「剛毅朴訥」「危険にのぞんで勇猛心を発揮する」「豪快」等が書かれてあった。これを読んで僕の心には、母校の気質が浮かんできた。これらの言葉とかなり一致するものがある。母校の気質は、ある意味ではかなり九州的な特色が残っているのかもしれない。

今日、地域の特色というものは、急速に失われつつあるが、時には、美徳ともいえるこの気質を思い起こしてみるのもいいのではないかと、思う。

## ◇テレビ業界で私は◇

テレビ朝日・営業副部長 前原 晃昭(2回卒)

2回生の前原です。東京に本社を置くテレビ朝日に勤務しています。昨年のゴールデンウィーク明けに、転勤で関西支社に45才の単身赴任をしました。関西支社に着任早々南高関西同窓会に参加させていただき、加えて母校の創立30周年を寿ぐことが出来ました。

2回生として入学し、未整備のグラウンドで奮をかっただ日から30年近くの歳月が流れたことに万感胸にせまる思いです。今回の投稿のテーマは、なるべく仕事のことや、関わる業界のことをという編集幹事のご指示ですから、テレビ業界のことをまことに拙文ですが少し書かせていただくことにいたします。

私の勤務いたしますテレビ朝日の番組は、皆様の生活される関西地区ではABC(朝日放送)で放送されています。ニュースステーションや、日曜洋画劇場などがその代表的番組です。テレビ朝日とABCは全くの別会社ですが、我々の業界ではこの関係を系列局と呼んでいます。私どもテレビ朝日が制作した番組のかなりの部分を放送してもらっています。テレビ業界も御多分に洩れず景気後退の余波をうけ、先行きの不透明に悩んでいます。

しかしながら、テレビの持つ使命はその重要性を増していると感じております。昨年の湾岸戦争を引き合いにいたすまでもなく、テレビの報道機関としての役割が新聞同様に大きくなってきています。湾岸報道合戦で示された様に、テレビ視聴者は、茶の間でさまざまな情報を現場にいるかのように同時体験できる時代になってきたわけです。またそれだけに、テレビジャーナリズムの責任も重くなってきていると痛感しております。しかしテレビの視聴者は湾岸戦争のようなニュースばかりを求めているわけではありません。日常の地域・生活に密着した情報を望んでいるのです。とりわけ、エンターテインメントに豊む番組を求めています。クイズ・歌番組・ドラマ・時代劇・映画などその要求は多岐にわたります。それらの一つ一つの満足度を上げてゆく作業を行っているわけです。テレビ界のほんの尻尾に携わっているにすぎない微力な私ではありますが、これらのことを念頭において努力をしております。

限られたスペースで意をつくせない文章になりましたこととお詫びし、加えて長崎南高関西同窓会の益々の発展を祈念し、少しでも同窓会活動にお役に立てるべくご協力をさせていただくことをお約束して、結びとさせていただきます。

## ◇方言について考える◇

積水化学工業 森永 哲司(13回卒)

「なんばしょとね」「元気しとっ」と等々が標準語である文化圏より離れて、早いもので15年経ち、建都1200年で沸く古都、京都にて現在生活の糧を求めています。

人は年を重ねるに従い、そのスピードが加速度を増すと云いますが、本当に早くも35年、いろんな思い出が走馬燈の如く、頭の中を駆け回ります。そんな35年の間に、長崎、神戸、名古屋(三河地区)、大阪、京都といった世界でも名だたる日本5大都市(?)にて、人情に触れ、商売を憶え、時には怒りに打ち震え、哀しみにうちひしがれたこともありました。

「一番楽しかったのはどこ?」と問われると、つい「…」(無言になり)、考え込んでしまいますが、それぞれ楽しく、いろんな思い出があるだけに、「全部ですよ」というのが最も当たっている答えではないかと思えます。そんな中でも「言葉」。これだけは、その土地独特のものがあつ、決して、一度住まないとな理解できない(ひょっとすると全く分からない)ものばかりではないでしょうか。

特に、日本特有の曖昧なニュアンスの言葉—よかよか(長崎)、よろしおす(京都)、ええんちゃう、かまへん(大阪)等々、何が何やらさっぱり分からず、もちろん前後の会話がないと何とも意味を持たない言葉になってしまう。

それでも、浜町が「よかよか、わかっどっけん」と言われ心が和み、祇園で「よろしおす、まかせておくれやす」と言われ安心して酒を飲み、「かまへんがな、やまひょや」と言われ、つい商売に力が入る。そう考えると、なるほど日本語とは、いや方言とは、ぐっと心を魅せる素晴らしいものです。

こんなに素晴らしく心を魅せる方言も、前後の会話により多少は分かるものの、前述しましたようになかなか理解できず、尚かつ感覚的な言葉もこの世にあります。その最たるもの—そう、皆さんが長崎に帰った時や、久しぶりに梅田界わいで出逢った時よく出る言葉。あの言葉ですよ。なかなか文章で表現するのは不可能に近く、しかしながら芸術的方言。「しとととっ」、(呼応して)「しとととっ」、それに加え「ふーふーしたらよかばい」等、これぞ長崎弁の真髄、極致、いや方言の極致ではないでしょうか?

かなりオーバーな表現になりましたが、近頃関西同窓会や同窓会幹事会で長崎弁を聞く機会が増え、深く味わいのある長崎弁を思い出し、一層親しみが出てきたバイ!やはり、おくんち、ハタ上げ、精霊流しですらもじっとしておけない血が流れるこの体には、やっぱり長崎弁が最高です。

近頃、プロ野球界で人事問題が騒がれておりますが、話題の方が20年程前(?)におっしゃった言葉を引用して、結びの言葉に代えさせていただきます。「昭和32年、長崎に生まれ、その後移動があったものの、35年間生きて参りました中で、曖昧ながらも魅力的かつ感覚的な長崎弁。この魅力溢れる長崎弁は、永遠に不滅です。」

## ◇タイへ行くには◇

タイ文化研究所長 吉岡 みね子 (4回卒)

ご存じですか?日本で始めてシャム(今のタイ)の船が入った港が長崎だということ・・・。

シャムと長崎、実は深い歴史が古くからあります。豊臣秀吉の御朱印貿易時代に豪商として知られる木屋弥三右衛門や末次平蔵も当時、シャムとの交易で一旗あげたそうです。

こんなタイを一度話のタネに訪れてみてはいかがでしょうか。意外や意外、思わぬ”みつけもの”に出会うかもしれませんよ。

まずタイへ行くには、飛行機の切符の手配から(船旅もいいかもしれませんが、近い?遠い?将来、私達がシルバー層になってからの楽しみにとっておきましょう)。

飛行機はタイ国際航空が大阪からマニラ経由で毎日、直行便では火、木、金、日曜に運行しています。他の便もありますが、タイの人にタイ国際航空で来たということ、さすが誇り高いお国がら、大変喜ばれます。因みに値段はディスカウントチケットでほしい往復13万円前後から、航空会社によっては10万円切ることもあります。

ホテルはピンからキリまであります。サービスでは世界一のランキングを誇るあのオリエンタルホテルや、去年オープンしたハイヤットホテル、最近ではゲストハウスもたくさんできています。心すべきはホテルとは外国人が泊まるもの(タイの人はわざわざホテルには泊まりません)、決して安くはないということです。星印がつくホテルなら日本と同じ、あるいはそれ以上の料金です。

### — 食べ物 —

さあ、バンコクに到着しました。まずは腹ごしらえです。食の宝庫のタイで真先に何を食べる事にしましょうか。お勧めは今、日本でも大人気のスープ、トムヤムクンやタイスキヤキ、パイナップルを容器にしたカオパッ

ト(焼き飯、米の中にカニが入っているのではなく、カニの身の中に米があるという感じ)、その他いろいろガッツの心意気で何でもご試食を。デザートはココナッツのアイスクリームに季節折々の果物が最高でしょう。トウリアン(ドリアン)は4月から7月、マンゴスチンもだいたいその頃、マンゴーは3、4、5月、日本の十分の一くらいの値段で食べられるというのですから、食いしん坊にとってタイはまさに”天国”です。

### — みどころ —

それぞれの好みによって、よりどりみどり。例えば歴史、芸術に興味のある人はバンコク市内のタイ国立博物館、国立劇場、さらに足をのばして古の王都アユタヤー、スコータイの栄華をしのぶのいもいもでしょう。また工芸品に関心のある人はタイ北部のチェンマイ、東北部のシルク産業、そして南国の碧い海を求める人は南タイのプーケット島へ・・・。行くところ行くところ知られざる世界を提供してくれること請け合いです。

### — みやげ —

かの有名なタイシルク、タイコットン、金製品、銅製品、漆器、民芸品、ここで語るにはページが足りません・・・。

最後にもう一つ、タイへ行く前にぜひお勧めは”ちょっと風変わりな?アプローチ”つまり”タイの小説”を読んでから行きましょう。観光パンフレットよりずっしりと重い、また楽しいタイがきっとエンジョイできますから。たとえば大東亜戦争時代をアジアの目からみるには筆者訳「地、水そして花」(財団法人大同生命国際文化基金 Ⅲ 06-385-1131)タイの社会・歴史・自然を知るには「サーラピーの咲く季節」(段々社 Ⅲ-03-3999-6209)など。

やれやれ、お疲れさまでした。日本到着です。次はあなたの好きな季節に合わせて再びタイの土を踏んではいかがですか?それとも南高同窓会をタイですするのもグッドアイデアかな?まずはこれまで。サワディーッカ

## ハタあげ大会の案内

南高同窓会の野外活動として毎年開催されている長崎県人会のハタあげ大会・コマ廻しコンクールに参加したいと思います。皆さんの家族連れでの参加を期待します。

日時:平成5年5月16日(日)予定 雨天時は次の日曜に順延 AM11:00~PM3:00

場所:淀川畔の豊里大橋の橋下公園

交通:①地下鉄谷町線-太子橋今市下車-3番出口

②京阪電車-滝井又は土居下車

会費:1家族¥1,000-

弁当:各自持参してください。

※本誌を発行する段階では日時が確定していません。参加者は参加前に必ず事務局(TEL06-365-6445)まで日時について問い合わせ下さい。

## ◇理想・気魄・情熱◇

東京海上火災・北海道本部 吉田 一久(3回卒)


私が南高を卒業したのは1966年、26年も前のことになる。自分もつくづく歳をとってきたものだと思う。長男が高二であるので、ちょうど一代を経てきたのかなとも思う。学校も先生も生徒も卒業生も随分変わったことだろう。

しかし校訓はまだ変わらずにあるのではなからうか。校訓というと何か古めかしくて、押しつけがましくて、やたらに教条主義的響きを感じさせる。南高の校訓も例外ではないかもしれないし、若い人達にとってはカビ臭いものなのかも知れない。バッテンである。私にとっては、南高の校訓の一つ“理想は高く、気魄と情熱に燃えよ!!”という言葉は、まさに私の精神構造、肉体の成り立ちそのものといえる。サミュエル・ウルマンの言葉を借りるまでもなく、私にとっての青春とは“気魄と情熱”そのものであって、それを未だに頑なにキープしているつもりである。最近、同期入社のもの達から「いっきゅうは新入社員の間からちっとも変わらない」とよく言われる。もちろん髪の毛も次第に薄くなっているし、腹の筋肉も徐々に垂み始めてきている。多分同期の彼らが私のことをそのように見ているのは、22年前の入社当時、将来自分が会社でどのような地位にまでなるのかと話し合った際、私が高不遜にも「社長になる!!」と言ったことを覚えていて、しかも私が変に年寄りじみて物分りのいい人間にはならず、常に何かに燃えている前向きなままでのことを評してのことと思う。

あくまで理想は高く!!であり、何も立身出世主義で人を押し退けても地位や名誉を欲しがるといふ上昇志向

ではなく、会社の社員たる者いつでも自分が社長になったつもりで事に処すべきであり、またいつでも社長にとって代わりうるよう自己研鑽を怠らないよう努力するという気魄と情熱を持ち続けることが、結果としてどのような境遇になろうとも満足のいく人世となりうると確信しているからである。これは会社が大きかろうと小さかろうと関係はないことで、一流大企業であろうとも決してビビルことはないと思う。

しかも新入社員頃の青臭いともとれるこのような考え方をずっと持ち続けられることが“青春”そのものではなからうか。

振り返ってみると、私のこのような考え方は南高時代の三年間に主に培われた。我々団塊の世代はよく“灰色の受験地獄”などと巷に言われたものであるが、南高生である私にとっては“両立”が当然であり、灰色とか暗さは思い出の中にみじんもない。南高における私の思い出の中にあるのは、高一のとき高体連に柔道の選手として出場しベスト8へ進出できたことをはじめとして、伝統の創造に参画できたこと、および生徒会長もやり、 受験勉強のみならずやけに忙しい学生生活を送ることができたこと、友人をはじめ先輩、後輩、はたまた先生方との素晴らしい出会いである。もちろんいいことばかりが思い出に残っているのではなく、苦いことも、嫌なことも、酸っぱいことも沢山あった。それらが凝縮して精神構造、肉体の中に鉛の如く沈澱しているのが校訓である“理想は高く、気魄と情熱に燃えよ!!”なのかも知れない。

関西にいる同窓の人達よ、近いうちに理想・気魄・情熱について語り合おうではないか。年齢に地位その他一切関係なく、同じ校訓を持つ高校を巣立った者として。あくまでも青臭くこだわって。

## ◇私の好きな瞬間と場所◇

日本交通公社 奥平 文雄(16回生)

長崎を離れてちょうど10年。出身地を尋ねられて、九州の「長崎」ですと答える。相手の顔にどこかうらやましそうな色が浮かぶ。私の好きな瞬間。

「故郷は遠くにありて思うもの。時間をかけて帰るもの」私は列車の帰省が大好きだ。新大阪駅のホームに立つと、これから始まる800kmの旅にいつもわくわくする。「次は岡山」あと600km。瀬戸大橋や桃太郎も楽しいけれど、おくんちと精霊流しの派手さにはかなわない。「まもなく広島」あと450km。生ガキやお好み焼も捨てがたいけれど、皿うどんや豚の角煮は忘れられない。「博多に到着いたします。長崎本線はお乗り換えください。」ここはもう九州。空気も光もやわらかく私を迎えてくれる。ここまで来たらわずか160kmだけれど、これからが一苦勞。けれども800kmの旅の醍醐味はここからが本番。山と海が折り重なり、いく

つもの小さな漁港を過ぎ、列車が身をくねらせるようにしてトンネルを通るたびにだんだんと故郷が近づいてくる。

諫早を出て喜々津を過ぎると長いトンネル。窓からいきなり光が差し込んできたら、いつの間にか長崎の町中に飛びこんでいる。「終点、長崎です。」線路の先の行き止まりになったホームの壁が近づいてくる。まさに行き着いたという感じである。駅前のタクシー乗場で、使い慣れた関西弁が出ないように意識して「白木団地までたのみます。」人なつっこそうな運転手が「今日もほんごつ暑かですね。」ああ、やっと帰ってきた。町はあいかわらずガイドブックやカメラを持った観光客で賑わっている。ハウステンボスやバレンタインハウスも良いけれど、昔の南山手も忘れられない。

雨あがりのオランダ坂を上がる。活水の横を過ぎて、道の端のV字形の石畳の溝に流れる雨水を目で追いながら振り返る。陽の沈みかけた稲佐山の麓には長崎港が静かに横たわる。これが私の一番好きな場所。

◇ 絶妙の距離 ◇

馬場米穀店 馬場 昭徳 (4回卒)

最近は特別の野球ファンという訳ではないが、やはりプロ野球のことは気になる。それに反して高校野球なんかは苦手である。高校野球だと、エラーしたり、好機に三振したりした選手を罵る訳にはいかない。まあ、昔はそうでもなかったけれど、40男の分別として、高校生ならエラーしたり三振したりするのが当たり前などと言いついて聞かしていると、どうしても距離ができてしまう。

そこへ行くとプロ野球の方は気楽である。三振した選手を、乱打された投手を罵っても後めたさがない。なにせ仕事で野球やっているのだから、ヒット打っても当然、三振とって当たり前なのである。

ひいきチームもだいぶいい加減になってしまった。昔は西鉄ファンでその流れで西武ファンであったが、思えば西武の旧西鉄勢(最後は太平洋クラブだったかな?)に対する仕打ちは極めて冷たかった。なんだかんだと言って東尾の引退試合もとうとうやらなかったくらいだ。なんとなく西武熱もさめてしまったが、やはりどこかひいきチームがないと見ても面白くない。そこでこのところは前年の最下位チームを応援している。従って今年はロッテと阪神。期せずしてこの原稿を書いている時点では両チームとも好調で、スポーツニュースを見る

楽しみもあると言うものである。しかし、正直言ってどこまでもつかなく言う気が強い。

さて、その野球に関して最近つくづく面白いと思うのは、投手と打者の距離であり、この距離と投手の投げる変化球の関係である。打者と投手の距離が何メートルかは知らないが、まあこのくらいが丁度適当だろうとみんなだワイワイ言いながら決めたのだろう。勿論、その頃は投手は直球しか投げていなかった筈である。そのうち投手がいろいろ工夫して球の握りを変えたり、球に回転を与えたりするとボールが曲がるのがわかった。昔、聞いた話で正確でないかも知れないが、かのジャイアンツの沢村もプロに入って初めの間はカーブの存在を知らなかった。アメリカの投手が曲がる球を投げるのを見てびっくりしている。スライダーだって日本で初めて投げられたのは戦後のことである。

それがその変化球を投げてみたら丁度、ホームベースの上で変化すると言うのが面白い。断じて球が変化する地点にホームベースを置いたのではない。たまたまホームベースの上で、即ち打者が打とうとしたその地点で変化するのである。しかも全ての変化球が一樣に。フォークボールなんか打者の1メートル前で落ちてしまったら尻の役にも立たない。もしホームベースの後1メートルで落ちるのならその前に捕手のミットに収まってしまふ。ホームベースの位置が何十センチかずれていたら野球の歴史も大きく変わっていたらう。

総会出席者一覧表 (平成4年度)

回	会 員 名	旧姓	回	会 員 名	旧姓	回	会 員 名	旧姓	回	会 員 名	旧姓
1	彦義子一蔵	清成	2	永福佐川山松	5	多立小間結井高田中山壺川小	古岡古川古賀古賀古若	12	熊本藤永井熊	一ノ瀬	
2	宣重直雅源雄	小林	3	野島藤井下島布田藤代村垣尾岡本丸地宅田谷串松本	6	田山野淵城上草坂村西田井原堀島込	吉岡古川古賀古賀古若	13	寛政康哲美紀子	山下	
3	村尋井山川谷石原江原谷原本橋田井谷村斐谷倉崎保下井中	篠崎	4	義伸比洋幸育千陽賢一悟金江みね久純朗正秀啓由清喜隆久美子隆博政典	7	徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	野副	14	治僧代司子浩三男子郎浩昭一喜子雄司子生信宏美子治務裕雄	空閑	
4	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	古川	5	典一美子代子子一行好津江みね久純裕子子貴節喜隆美子隆博政典	8	徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	15	寛政康哲美紀子	今村	
	宣重直雅源雄	小林	6	野島藤井下島布田藤代村垣尾岡本丸地宅田谷串松本	9	徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	16	治僧代司子浩三男子郎浩昭一喜子雄司子生信宏美子治務裕雄	今村	
	村尋井山川谷石原江原谷原本橋田井谷村斐谷倉崎保下井中	小林	7	義伸比洋幸育千陽賢一悟金江みね久純朗正秀啓由清喜隆美子隆博政典	10	徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	17	寛政康哲美紀子	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	8	典一美子代子子一行好津江みね久純裕子子貴節喜隆美子隆博政典	11	徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	18	治僧代司子浩三男子郎浩昭一喜子雄司子生信宏美子治務裕雄	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	9	義伸比洋幸育千陽賢一悟金江みね久純朗正秀啓由清喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	19	寛政康哲美紀子	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	10	典一美子代子子一行好津江みね久純裕子子貴節喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	20	治僧代司子浩三男子郎浩昭一喜子雄司子生信宏美子治務裕雄	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	11	義伸比洋幸育千陽賢一悟金江みね久純朗正秀啓由清喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	21	寛政康哲美紀子	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	12	典一美子代子子一行好津江みね久純裕子子貴節喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	22	治僧代司子浩三男子郎浩昭一喜子雄司子生信宏美子治務裕雄	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	13	義伸比洋幸育千陽賢一悟金江みね久純朗正秀啓由清喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	23	寛政康哲美紀子	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	14	典一美子代子子一行好津江みね久純裕子子貴節喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	24	治僧代司子浩三男子郎浩昭一喜子雄司子生信宏美子治務裕雄	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	15	義伸比洋幸育千陽賢一悟金江みね久純朗正秀啓由清喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	25	寛政康哲美紀子	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	16	典一美子代子子一行好津江みね久純裕子子貴節喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	26	治僧代司子浩三男子郎浩昭一喜子雄司子生信宏美子治務裕雄	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	17	義伸比洋幸育千陽賢一悟金江みね久純朗正秀啓由清喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	27	寛政康哲美紀子	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	18	典一美子代子子一行好津江みね久純裕子子貴節喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	28	治僧代司子浩三男子郎浩昭一喜子雄司子生信宏美子治務裕雄	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	19	義伸比洋幸育千陽賢一悟金江みね久純朗正秀啓由清喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	29	寛政康哲美紀子	今村	
	中八坪中古岩高前片桑高田松高室石鹿中甲高米川久山酒田	小林	20	典一美子代子子一行好津江みね久純裕子子貴節喜隆美子隆博政典		徹春等豊俊久美子太樹子枝子喜美子恒彦芳純浩夫子彦都美和子子介康	谷口	30	治僧代司子浩三男子郎浩昭一喜子雄司子生信宏美子治務裕雄	今村	

# ご存知ありませんか

下記の方々は昨年度、転居先不明等で郵便物が戻ってきた会員です。  
ご存知の方は事務局までご通知をお願いします。  
また、転居等で最近関西地区に居住された方のご連絡を熱望します。

回	氏名	旧姓	回	氏名	旧姓	回	氏名	旧姓
3	中村和子	平山		上戸不二男			永田敏恭	
5	松浦優子	峰	19	高比良博		25	山崎一誠	
	平野武守		21	山浦木辺			早田英樹	
	松尾精一郎		22	荒渡野中		26	井澤元美	
	小川威子	増田		下田本釜		27	島野道達	
9	森崎惠美			中下隆紀			古賀美新	
12	松永博幸		23	中中寛一			立安	
13	出利葉太郎			中尾潤				

## 編集後記

○第一回目の会報発行から半年が経ちましたが、その間に事務局には「モッテコイ」「モッテコイ」の声が届けられました。そこで”ノボセモン”の多い編集スタッフは年2回のペースで発行することを決意しました。会員の皆様が何らかの形で長崎南高とのかかわりを持続する為には必要であり、故郷の情報を少しでも知らせたいという基本的な欲求がある限り継続すべきとの判断によるものです。その目的の為には原稿をいかに幅広い層から集められるかに尽きるとおもいます。さすがに文章力のある年齢層も存在しますが、それより大切なことは生きた話題を提供してもらうということです。若い会員の皆様の積極的な寄稿を期待しておりますので、是非ご協力下さい。

- I・K -

○編集会議に初めて参加しました。私に出来る事があるのかを考えましたが、取り敢えず”身体”だけ提供しました。結果、全ての段取りは手配済み。私はおんぶされ、おまけにだっこまでして戴きました。次回は”気合い”付きで参加したいと思います。

- K・Y -

○故郷を巣立って20余年という先輩諸氏の、未だ色あせない数々の思い出話に感銘を受けながら毎回の編集会議に同席させて頂きました。仕事に追われて物忘れもはげしくなった今日この頃ですが、せめて自分のルーツは見失わないで居続けたいものです。

- T・R -

<会費納入のお願い>

本紙発行の諸経費、及び長崎南高関西同窓会の運営費として年会費を同封の振込用紙にてお振り込み頂きますようお願いいたします。

長崎南高関西同窓会事務局

☎530 大阪市北区西天満3-6-3 西天満福岡ビル4F  
松本法律事務所内 松本藤一 (2回卒)  
TEL 06(365)6445(代) FAX 06(365)7081

発行：平成4年12月